橋　戸

令和４年１１月３０日
学校だより　第８号
練馬区立橋戸小学校
校　長　　青木　俊哉

先生はつらいよ！

校長　青木 俊哉

「学芸会」を終えてから、半月以上たちました。子供たちの意欲的な取組に加え、保護者の皆様のご支援・ご協力のおかげもあり、素晴らしい学芸会を開催できたと思っています。ありがとうございました。ここでは、学芸会に関わる教職員の働きを文に起こし、学校行事を創る裏側を紹介できたらと考えました。なぜなら、手前味噌にはなりますが、一つの行事に取り組む先生方の姿勢には、言葉では表しきれない素晴らしいものがありますから、せめてその一端を…。

学芸会は文化的行事です。本校では、「展覧会」「音楽会」とのローテーションで実施しており、３年ぶりの開催でした。学芸会に向けて、担任の先生方の最初の仕事は“子供たちが何を演じるか…”演目を決めることから始まります。早い学年では、年度初めの時期から考えると聞きます。子供たちの雰囲気に合うか、演技や演出への適性はどうか、難しくはないか、易し過ぎないか、配役数（出演人数）はどうか…など様々な要素を念頭に置き、脚本選定を進めます。演目が決まり脚本のめどが立つと、次は指導用の資料を探します。自分の指導経験を遡ったり、他校で指導された方にアプローチしたり、動画やワークシート、書籍や出版物を探したりもします。これらの資料は、教員の指導の参考になるだけでなく、時には子供たちに見せてイメージを膨らませる材料にもなります。本校の今年の実施時期ですと、この辺りの作業は夏休みくらいまででしょうか。２学期に入ると、台本の作成に始まり、大道具・小道具の作成、効果音の編集、音響や照明の計画、衣装の用意や保護者への依頼…と続きます。それぞれ手仕事が多く、まさに“職人のような”姿を見せてくれます。近年ではパソコンを上手に使い、作業の負担を減らす試みもしていますが、まだまだアナログ優先の世界のようです。もちろんこの時期には、練習は始まっていますから、“本務”は子供たちへの指導です。担任は、演出家であったり、大工さんやお針子さんになったり、技術者になったり、自らパフォーマンスを演じてみせたり…、様々な顔を見せながら、当日に向け子供たちの意識を高め、演技以外の力も付けられるよう指導していきました。

さて、この大きな学校行事の準備にあたったのは「文化的行事委員会」、本校では７人の先生方で構成されます。学芸会以外も含め、年間の文化的な行事・取組を想定し、細かな役割分担を決めたり、日程的な見通しをもったりした後、メインである「学芸会」の準備に取りかかります。コロナ禍での初めての実施ですから、“何を、どの程度”できるかも模索しながらの検討でした。昨年度実施した「音楽会」の提案や会場設営を土台に、感染状況も予測しながらの対応になりました。担当者には、提案と再検討を繰り返す面倒なプロセスを踏ませてしまいましたが、“今できる最大の舞台表現”をお見せできたのではないかと自負しております。

演技の指導は簡単ではありません。たまたま今年は、プロの演出家（「劇団風の子」代表の大澗弘幸氏）から直接ご指導いただく機会を全学年でもてました。私たち教職員にとっても、演技・演劇の指導を学ぶ貴重な機会となりました。運動会と違い、毎年の実施ではない苦労もある文化的行事の準備、「先生はつらいよ！」とこぼしながらも、子供たちの成長と変容にやり甲斐を見出し、手応えをつかんでいるからこそ、「行事を止めるな！」とも感じているはずです。